

アメリカの小学校

宮川 成雄

子供の留学

「お父さんの留学とちがうて、子供の留学やね」とは妻の言葉である。わが家の小学一年生は、朝八時半にスクール・バスに乗って学校へ行き、午後三時四十五分頃まで家に帰ってこない。学校に拘束される時間を比べると、ミシガン大学ロー・スクールの客員研究員として、自由に時間を過している私とは、大きな違いがある。少なくとも外見は子供の留学に付き添ってきた親である。

「子供を犠牲にしないように」と忠告して下さったのは、一九八九年八月の出発の前に、挨拶に行った日本の小学校の校長先生である。アメリカでの研究生活は、私にとってちょうど十年ぶり二度目である。前回は学生で独身であったが、今回は妻と子供一人を連れての渡米である。奨学金のスポンサーであるACLS（日本でいえば学術振興会）に報告書を書く以外に、これといった義務はない。子供と妻が有意義なアメリカ体験ができれば、という気持ちで、ミシガン州アーナバーでの生活を始めた。

アメリカをまず全身で体験したのは子供であった。就学前の予防接種の種類と回数が日本とちがうことから、両太腿に二本の注射をうたれた。翌日の下校途中に、熱を伴う湿疹が全身に出て、迎えに行った妻が大慌てをした。幸い下熱剤だけで翌朝には平常に戻ったが、病氣らしい病氣は、一年間でこのときだけだった。「子供を犠牲にしないように」との言葉が思い浮んだ。

マック・スクール

小学校の名前はマック・スクール。アーナバーの公立小学校で一番古い学校のようにだ。市営屋内プールが併設されており、公立小学校では唯一プールがある。日本式の運動会ができるような平坦なグラウンドはなく、起伏のある芝生の校庭があり、冬には雪の上で橇遊びが楽しめる。

住居が決まらなければ小学校が決まらないのは承知していたが、学区そのものが毎年かなり変更されるとは思わなかった。人種のバランスという要素もあるようだが、ミシガン大学のある市の中心部での、小学生人口の減少が大きな理由となっている。



スクール・バスの運転手さんと

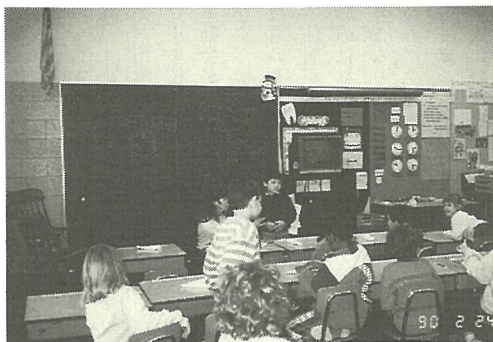
小学校をいくつか下見した上で、住居の候補を絞っていった。不動産屋は全く学区の見当がつけられないと言うので、候補の住居ごとに、自分で見当の小学校に電話をして確認しなければならなかった。スクール・バスの経路が発表されたのは、新学期の二、三日前の地元新聞紙上であった。

マック・スクールの一年生は二年级で、一学年に二〇数名の生徒がいる。一年生の

二年级には担任の先生に加えて、それぞれ教育実習生が一名づつ配属されていた。私の子供の担任の先生は二八、九歳の女性で、教育実習生はミシガン大学の女子学生であった。体育と音楽は、それぞれ三〇歳台半ばの男性と女性の先生が担当して下さった。二〇数名の全教員のおおよそ三分の二が女性であった。

これらの先生方とは別に、ESL（第二言語としての英語）の授業のため、いくつかの学校をかねもちで、女性の先生が教えに来て下さった。入学前の校長先生との面談で、子供は外国生活が初めてで、英語は日本出発前に数カ月、アルファベットを課外で学んだくらいである旨を説明すると、ESLの先生を手配しようと約束して下さった。さすが移民の国アメリカである、少数者への配慮がゆきとどいている、と思っていたと、校長先生は「家庭でもできるだけ英語を使うように」とおっしゃった。多民族国家であるから、こうして同化指向を強めなければならないのであろう。

授業は数回参観した。一年生という学年のせいでもあろうが、いささか規律に欠け



授業風景

るというのが、日本の学校教育を受けた私の第一印象であった。日本式に黒板に向かって整然と机が並べられているのではなく、その都度、机は並べ替えられるし、先生を囲んで車座になり、本を読む先生の話を聞いたりもする。授業中でも子供達は、結構自由に教室の中を歩きまわったりする。規律に欠ける」というのは私だけの印象ではないようで、アメリカ人の保護者の中にも、



ハロウィーンの仮装行列

ヤツや、魔女のマントや仮面を身につけて、全校生徒と全教師が、学校の周りの道路を仮装して、練り歩くわけである。子供達は下校の後、「トリック・オア・トリート」を言いながら隣り近所を回り、お菓子をもらって歩く。

この子供達にとって楽しいお祭りも、親達にとっては心配の種である。お菓子の中に

同じような感想をもち、先生に対する不満をもらしている親もあった。その是非ともかく、日本の大学生の受け身の授業態度に比べて、アメリカの大学生は自由闊達であるが、その原型を小学校一年生達の姿の中に見出した気がする。

ハロウィーン

ハロウィーンは、秋学期に子供達が楽しみにしている学校行事である。一〇月三日の午後は授業を早めに切り上げて、子供達が家から準備してきたお化けの衣装に着替える。骸骨やお化けカボチャを描いたシ

針やガラスのかけらなどを入れる悪質ないたずらがあるからである。ハロウィーン前の新聞には、よく知った人の家以外は行かないようにとか、開封した形跡のあるお菓子は食べないようにとかの注意記事が載る。幸い私達の身近で被害にあった人を聞かなかつたが、テレビなどでは、もっと怖い事件が報道されていた。ハロウィーンの夜は悪魔の夜といって、毎年放火事件が頻発するそうで、アナバーから車で三〇分くらいのデトロイトでは、昨年ひき続き、放火による大きな火災が発生した。

子供の誘拐も、アメリカで子供を持つ親

にとって怖いことである。毎週一回必ず郵便受けに、誘拐された子供のあどけない顔写真付きの、搜索願いの葉書が届いている。二、三カ月前に発生した、毎回別の一人又は二人の子供の誘拐事件の概要が記載されている。離婚にからむ子供の奪い合いという、営利目的でないものも多いと聞くが、アメリカの人口が日本の約二倍に過ぎないことを考えると、誘拐事件発生の頻度の高



クリスマス・コンサート
前の人が校長先生

さがわかる。日本のように新聞、テレビで事件が大きく報道されることもない。捜索願いの葉書の裏に印刷された日用品の値引きの広告が、幼児誘拐の日常茶飯的発生を無情にも印象付ける。

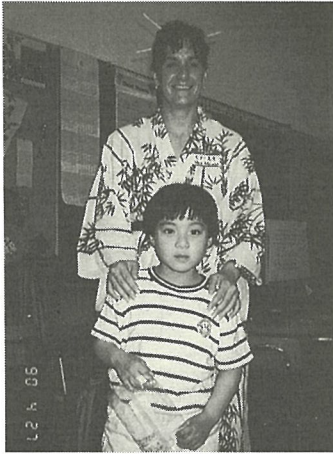
秋学期の半ばが過ぎると、担任の先生と保護者との個人面談があった。わが家の一年生はだんだんと英語にも慣れてきて、時々自分から手を挙げて、簡単な表現ですむときには、積極的に授業参加をするらしい。アメリカ人のアジア人に対する一般的評価の例にもれず、算数がよく出来るということである。本人は、週一回ある水泳の時間と、それに加えて週二回あるジムの

時間を一番楽しみにしている。時には友達とけんかをするが、言葉が通じないもどかしさを感じるらしい。しかし全般的に順調に行っているようだ。

クリスマススの学習発表会には、保護者が各家庭から手作りのお菓子を持ち寄り、子供達の図画工作の展示を見たり、クリスマス・ソングの合唱を聞いたりする。合唱では私の子供は第一列目に並んで歌ってくれたが、よく見ると半分くらいは英語の歌詞に口を合わせて、「バクバク・コンサート」を演じているのがわかった。親の都合で言葉の通じない学校へ放り込まれ、けなげな努力をする教室での勉強姿が、舞台の上で合唱するわが子の姿に重なった。

日本文化の学習

春学期には「世界の文化に親しむ夕べ」が催された。全校の各学級が一つの国をとりあげて、約一カ月前から授業でその国について学び、教室に展示物などを作る。私の子供の学級担任の先生は、日本をとりあげて下さった。わが家



担任の先生と



日本の童謡を歌う子供達

からは大きな日本地図や、家族三人で折った多数の折り紙などを提供した。「親しむ夕べ」の一週間ほど前には、クラスの世話役のお母さんから、当日、教室で食べられる日本料理の作り方を教えてほしい、と電話がかかってきた。日本茶と、油で揚げるお菓子の準備をお願いし、わが家でてんぷらと串カツを作っていくことにした。

当日、学校へ行ってみると、教室には「雷

門」と書いた大きな提燈がぶらさげてあり、日本人形や日本の風景写真が飾られていた。食べ物もわが家が準備した物だけでなく、近くの東洋食品店で買った子供向けのお菓子などが、テーブルに置いてあった。子供達には、キモノを着てくるように、との指示が担任の先生から出されており、寝間着風ガウンや、日本で買ったと思われる可愛い女児用ゆかたなどを着た子供達が、次々と集ってきた。なかには今日のために、型紙を使ってハッピ風キモノを縫って下さったお母さんもあった。とりわけ目を引いたのは、男物ゆかたに黒い鼻緒の下駄をはき、髪にはかんざし風にお箸をさした担任の先生であった。尋ねてみると、学校に日本衣装の一式が置いてあったそうである。

次に講堂で子供達による日本の童謡とお遊戯が始まった。音楽の授業で一カ月ほど練習してきた「くつが鳴る」や「てるてる坊主」などを、簡単な振り付けとともに披露してくれた。みんな胸には、私がカタカナで書いた名札を付けてくれた。

アジアの東の端から来た一人の子供のために、先生方、保護者のみなさん、そして

クラスの子供達が示してくれた、異文化を学ぼうという具体的な努力に、大きく心を打たれた。翻って日本を顧ると、アジアからの転入生が仮りに小学校であったとして、その国の異なった文化を学ぼうとする努力が、保護者をも含めて具体的にどれだけできるであろうか。異質のものを同化するのではなく、異質であるがゆえにその価値を認めることが、どれだけできるであろうか。韓国・朝鮮の文化に対する現代日本人の態度を例に引くまでもなく、その答えは否定的になるであろう。

「子供の留学」を通して、私達夫婦も多くのアメリカの大人達、子供達と知り合うことができた。日本の校長先生の願いどおり、「子供を犠牲にすることなく」家族三人で、有意義なアメリカ体験ができたと思う。なお「お父さんの留学」については、女子大学の学内誌「しばぐさ」第二九号に、ミシガン大学の様子を書いた拙文を掲載していた。

(女子大学助教歴)

同志社談叢

第十号

論文

新島襄晩年のころ……………竹中正夫

—その「畢生の目的」をめぐって—

新島襄の大学設立運動(二)……………河野仁昭

父・久永機四郎の記……………久永省一

—新島襄の小さな弟子の一人として—

山崎為徳評年譜……………高橋光夫

高標元一郎の柏木義円宛書簡をめぐって

……………室田保夫

資料

新島襄葬儀記録……………

亡愛夫妻発病ノ覚……………新島八重子

新島襄に関する文献ノート

(その八)……………河野仁昭

『新島襄全集 第五巻—日記・紀行編』

人名索引……………加茂正典

(頒価一、〇〇〇円・送料二六〇円)

発行・同志社社史資料室

取扱い・同志社収益事業課

電話(〇七五)一二五一—三〇三七・八